
三月兎のための即興曲

九滌 温

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三月兔のための即興曲

【Nコード】

N5092B

【作者名】

九瀬 温

【あらすじ】

卒業間近の私の不安定な世界観。ある日を境に崩壊に向かっていく日常の中で、繰り広げる様々な人間との対話篇。現実よりリアルな虚構を目指して書きます。

第一話『鏡』

通り雨が地面を濡らす。信号が黄色から赤に換わる瞬間に、降り出して。赤から青に換わると止んだ。

気まぐれな彼女の悪戯のせいで、肌が蒸れて湿っぽい。

卒業に必要な単位を取ると、急に芸大に興味が無くなった。絵は今でも好きだけど、描きたいものがないのだ。

「先輩も、もうすぐ卒業ですね」

「そうだね、早いなあ。つい、こないだユリちゃんが入学してきたのね」

「スタバ、混んでますね。どうします？」

「うーん、待つ」

「言うと思いました。先輩って待つ女ですよ」

「どういう意味で言ってる？ユリちゃん」

半分は、絶妙な毒舌の使い方、もう半分は絵が理由で私達は仲良くなった。絵は断然ユリの方が上手い。ユリ曰く、先輩の絵は何にも執着してないから好き、らしい。

二人とも、人付き合いは苦手、部屋で絵や読書してるタイプで、友達が少ないけど知り合いが、やたらと多い。

目立つ事のない、私の絵でもコンクールに出せば、それなりに評価される。ユリに言わせれば、小手先だけで描いたとバレバレだ。

私は、このユリのスカツとモノを言う正確が嫌いじゃなかった。

ただ、ユリが私に抱くような恋愛感情は無かった。だって、それは過ぎ去ってしまった、骨と皮だけになった憧れでしかないからだ。

私はユリに憧れる。ユリは私に憧れているつもりになっている。

「先輩は結婚しないんですか？」

「何？」

「だって、みんな先輩の事狙ってますよ。いつそ卒業したら、お嫁さんとかいう人生も悪くないと思うんですけど」

お嫁さんだけヤケに可愛く言う過剰な演出。

「お嫁さんは嫌だな」

「またまた、絶対、卒業式の後に、告白するパターンですよ」

「パターンって何だよ」

すぐに席が空く。既にピークは過ぎ去った午後七時。

甘過ぎて食べれなくなったパウンドケーキを持て余しながら分解する。

「それで、ユリちゃんはどうするの？ やっぱり芸大？」

何気無い進路の話。

「あそこに行っても何も無い気がするなあ。先生と馴れ合って、コネ持って、関係もって縛られて、気付いたら卒業みたい。あ、すいません先輩も芸大でしたね」

まるで写しとったように、私の心を代弁する。まるで鏡のような彼女。

私は恐れている。いつかユリが私を写さなくなった時、そこに何かが写り込む事を恐れている。一時間程、くだらないおしゃべりが続いて、ユリの携帯電話が鳴る。

解散の合図。そして二度と今日が訪れない。そんなに感傷的な気分ではなかったけど。少なくとも、頭の中では冷静に自分の哀愁を分析する余裕がある。

昼は長くはなっているが、夕焼けはとくに沈んでいる。地下鉄の駅へ向かうユリとの距離は少しだけ遠い。

その分だけ、改札までの距離は長い。

第二話『不格好な鳥』

街のとある劇場のスペースで密やかに卒業生展が行われた。一般客は、ほとんどが、偶然通りかかった通行人で、モノ珍しそうに、もしくは、つまらなそうに絵を見ている。

私は、主に入り口に立って案内をする役目で、借り物の白いスーツは似合っていない。

「ちよつと替わる？」

留学生で、私の隣でカウントをしているリュウジが言った。彼は、自前なのか、借り物なのか判断がつかないタキシードを着こなして、いかにも紳士のように言った。

小顔で、やけに整った顔が近付くと私は息が詰った。

「いいよ。あと二時間で交代だし」

「そう？気が変わったら何時でも言つてよ」

「わかった」

普段は、調子良くヘラヘラ笑ってる様な奴だが、本当の所はよく分からなかった。

子供を連れた女性の客が絵に対して説明を求めてきたので、少しだけ持ち場を離れた。

「芸大生の方？」

「いえ、大江高校の美術サークルの者です」

「高校生？どうりでお若いと思ったわ。私も昔、芸大に通ってたの。結局、結婚して辞めたんだけど」

「はあ」

綺麗な手をしているなあと思った。家事をしている人間の手とは思えない。

「貴方の描いた絵はどれ？」

「わ、私の絵ですか？」

突然、自分の絵はどれかなんて聞かれると思わなかったので少し

驚いた。

その女性の子供が私の絵を、じっと観ていた。自分の絵の下手さが解るのではないかと怖かったが、女性を案内する。

「これです」

題は『都鳥』。大型の渡り鳥で、真っ黒い背と、対照的な白い腹をしていて、長い嘴を持っている。

スケッチを基に、独自にアクリル絵の具で描き加えたものだった。普通、野鳥を描くときは柔らかい水彩絵の具を使う人間が多いが、私の場合は、線の細い都鳥よりも、力強い都鳥を描きたかったためアクリルで仕上げた。

拙い絵だったが、私が卒業展に向けて描いたどの絵よりもインパクトがあった。

「へえ、貴方の絵が一番上手いわね」

お世辞だと分かっているけど、やはり嬉しく思う。「お姉ちゃんが描いたの？」

気が付くと、女性の陰に居た女の子が、こちらを向いていた。

「そうよ、私が描いた都鳥」

子供の瞳は純粹で怖い。その輝いた眼に見つめられると、訳もなくごめんなさいと謝りたくなる。

「じゃあ、もう少し見てからまた戻ってくるわ」

戻ってくるという意味を掴み損ねた私は、去っていく女の子の後ろ姿を、ただ目で追っていた。

「随分と気に入られたみたいだな」

入り口から、現れたのは同じサークルのトキタとアツコだった。

「交代まで、まだ時間あるけど？」

二人が付き合っている事は誰がみても明らかで、サークル内では有名な話だった。

「いいから、いいから。リュウジ君と休んできなよ」

「え？本当にいいの？」

珍しくやる気があるアツコを不審に思ったが、二人の邪魔をする

理由は何もない。

「俺ら、スーツ着て外で歩くの嫌だし」

そう言ったトキタは、ホストの様だった。

「行こうか」

意外にもリユウジは乗り気で、それもまた私を戸惑わせた。

「どこかで軽く食べる？」

「うん、俺さ、上手いホットパイの店知ってるよ」

別に断る理由もなかったので劇場を出た。この格好では、少しだけ寒いなと思った。

第三話『野蛮なクリケットゲーム前編』

リュウジの言ったホットパイが美味しい店の事は、私もテレビで見たが、こんなに近くにあるとは知らなかった。

「寒いだろ。ハイ、上着」

「えっ、ちよつと……」

いきなり肩に上着を掛けられた。私は、こんなリュウジを見たことはない。

「リュウジってイギリス人？」

前に行くリュウジに、向かっていく何ともマヌケな質問をしてしまった。

「イギリス人のクォーター、祖母は日本人だった。急にどうしたの？」

「いや……イギリス人だから紳士なのかなあ、と思ってさ」

リュウジはキョトンとした顔になって、急に前を向いて真面目な顔になった。

「……誰にでも優しい訳じゃないよ」

「……え？」

「君が可愛いからだって、分かんなかった？」

不意打ちだった。私からふった話だったのに、直球で返された。
「アンタ、いつもそんな事言ってるの？」

精一杯、効いていないフリをする。

「ははは、俺ってそんなに魅力なかった？」

なんだ、冗談か。そう思うと余計に恥ずかしくなつてうつ向き。すぐに、冷静な表情を取り繕う。こういう技術だけは上手くなった、心を閉ざすんじゃないけど感情を抑制してコントロールする。

「リュウジって、意外と面白いね」

半地下になった店の入り口が見えた。お洒落なバーみたいだけど、造りがファンシーだから良い意味で目立つ。

クスリと笑った道化師のキャラクターが飾ってあったり、鮮やかな色の床だったり、なかなか男だけで入るには躊躇われそうな雰囲気だ。

リュウジは、ハワイパイというのを頼んで、私はココアパイを頼んだ。

こういう席で、コイツといること時点で何か間違っている気がする。

「俺のオフクロがさあ」

「オフクロ？ああ、お母さんね」

「結構、家庭的な人でさ、良くウチでパイを焼いてくれてさあ。ほら、日本ってあんまりそういう習慣がないじゃん？」

「そうだね、確かにパイは焼かない」

「だろ？だから日本に来て、この国ではオフクロのパイを食べないんだって気付いて愕然とした。俺が、覚えてたの日本語で『パイが』って言うたび、みんなが変な顔をするんだ」

「それは、そうかもね」

「そんで、こういう店にも、男同士で行くには入りにくいんだ」

リュウジが言いたかった事は解る気がする。イギリスの普通が通用しないこの国では、あたりまえにパイを食べる事もできない。

パイが運ばれてきて、もう、最初の違和感はなかった。今、ここでリュウジとパイを食べているのが、当然の事のように思えた。

「片瀬ってなんでそんなにCOOLなの？」

「え？」

「いや、冷たいとかじゃなくって、何か醒めてるなあって思って言われてみるまで、考えた事がなかった。何でだろう。」

「人間嫌いだから……かな」

これは嘘だった。

「そうなんだ。だから、そんなにCOOLなんだね。片瀬は、まだ男と付き合った事ないんだよね？」

何故、リュウジがそんな話をしてきたのか、まるで分からない。

今はできれば、そんな話はして欲しくなかった。

「もしかしてマズい事、聞いちゃった？」

そう言ったリュウジの顔は、全然悪びれていなかった。

私は、ただ黙って。お皿に描かれたピエロを見ていた。

第四話『野蛮なクリケットゲーム後編』

天井の一点を凝視していた私は、昼間の出来事を頭の中で反芻していた。

リュウジは、あきらかに私を口説いてきた。こういう風に、誰かに告白された事は前にもあった。

でも、中学の時は同年代の男の子がガキっぽくみえて本気になれなかった。

メールで落とされて、平気で付き合う女の子達も私の理解を越えていた。

今夜、食事に誘われた。リュウジは軽い奴だと思う。でも私の心は揺れていた。

何を着ていくかという以前に、何を話せばいいのか分からなかった。私は本当にリュウジの事を好きなのか？その疑問は、約束の間になってリュウジが向かえに来て止まなかった。

「ねえ、こういうの、初めてなんだけど。大丈夫かな」

「うん、その服も似合ってるし、昼間より色っぽいよ」

「いや、そうじゃなくて」

私はリュウジの顔を、まともに見れない。

「心配ないよ。俺がしっかりエスコートするから」

タクシーで向かったレストランは、大きなホテルの中であって、高級そうな店だった。

私は、自分一人が浮いているような気がしてならず、リュウジの話を聞いても上の空になっていた。

そして、気付いた時には、リュウジに誘導されるがままに、窓側の席に座らされていた。

「片瀬の描いた絵ってアクリルだったよな」

「うん」

「なんで、わざわざ水彩絵の具を使わないの？」

「え、なんか線が心細い水彩よりアクリルの方が良い気がして……」

「ふーん、片瀬って水彩より油絵に向いてる気がする。だって、人物画も得意だし」

「得意って事もないけど」

「この夜景を描くなら、どの画材で描く？」

自然な流れで夜景を見ると、雅びやかな光の群れが闇夜を照らしていた。街が昼間とは違う魅力的な妖しさを放っていた。

「どう？この席が一番、夜景が綺麗なんだ。予約がいっぱいで大変だったんだ」

私は、その言葉に微かに違和感を覚えたが、それよりも圧倒的な夜景に飲み込まれていた。

普通の女の子なら、キレイとか素敵とか喜ぶのかもしれないが、私はこの夜景を描きたいと、全く別の事を考えていた。いつのまにか、出てきた料理も無くなって、変にロマンチックな雰囲気になっていた。その気になれない私は、まるでセリフを忘れて舞台に立ちつくしているように居心地が悪かった。後悔していた。この後の事を考えるのが嫌だった。リュウジの言葉が、形のない泡になつて消えた。

「ゲームオーバーか……」

「え？」

私はホテルの部屋の扉の前に立っていた。

「どちらのお嬢さんが先に堕ちるか……賭けてたんだ」

それは、夜景を見ていた時以上に嫌らしい笑顔だった。

「あんたか百合のどちらが貞操を失うかってこと」

「嘘……何いってんのよ」 後ろにはトキタが控えていた。何もかもが最悪だった。

「ほら、見ろよ。百合の工口い写真。良かったらあげようか？」

「うるさい。あんた百合に何したの？」

「これは百合が望んだ事さ。早く大人になりたいって言ってたぜ。」

良かったな片瀬ちゃんは純潔が守れて」

「悪いな、女王様の命令だしな。このゲームを辞める訳にはいかなかったんだ。」

何かが、おかしいと思っていた。確かに、いろんな覚悟は決めていたが、百合にまで手を出していたなんて許せなかった。自分が遊ばれていた以上に、悔しかった。

百合の恍惚とした顔が映った写真の束がホテルの廊下に散らばった。

私は見たくもない写真を拾いながら恨めしそうに二人を見た。

「俺は、片瀬が先に堕ちると思ったんだけど」

リュウジが見下しながら言った。

「一生、処女で生きてろブス」

トキタが吐き捨てて逃げた。

私は泣かなかった。代わりに私はその写真を千切ってロビーのゴミ箱に棄てた。

あいつらが思っている程、私は清純なんかではない。少なくとも、あんなゲス共に見下されて泣き寝入りできる程、潔くはない。

第五話「蝶」

夜に歓楽街を歩いたのは、初めてだった。

頭の中が真っ白になっていて、ホテルから何処をどうやって歩いて来たのか分からなかった。

道行く人が、みんな悪人に見えて、立ち止まらない事で、なんとか崩れ落ちそうにならずに済んだ。

けれどいつのまにか、暗いところよりも明るい所に誘われるように、歓楽街に戻ってしまった。

これではまるで、男を誘っている娼婦の様な妙な気分になっていた。

「おネエちゃん、幾等？」

「あの、私は……」

「なんだよ素人かよ、もしかして援交？若いのにやるねえ」

「違います」

「で、幾等なら俺とやってくれるの？」

男は若いが、品がない顔をしていた、冷静に私は品定めをしている自分に気付く。

「百万……で、どうですか？」

「マジかよ、自分にそんな価値があると思ってるの？」

「……」

「なんなら、このままワゴンに詰めて数人でマワしてやろうか？」

「……やめてください」

「冗談だよ、でもそんな顔してると、本当に連れてかれるぞ」

「……」

「そうだなあ、アンタなら素人だが、上玉だから八万って所かな」

「それっぽいですか？」

「処女なら九万。それ以上は出せないね」

私は確信していた。私が蝶でクモの糸にひっかかったのではない。

私の糸が、この薄汚い蠅を捕えたのだという事を。

「十万とタクシー代、それ以下なら私は嫌です」

「……オツケー、来なよ」

「何処に行くんですか？」

「おいおい、ホテルに決まってるだろう」

「お金、もつたいたないです。貴方の家に行きましょう」

「……分かった、車とってくる。その通り道で待ってるよ」

そういうと、男は車をとりに走っていった。私は、あまり怖いとは思っていない自分に気付く。

今なら、逃げるのは難しくない。誰も見ていないし、あの男もいない。場違いな格好で、場違いな行動をしている自分が居た。これから起こる事は分かっている。けれど、何一つ怖い事などなかった。

その先に行きたいと願ったのは他でもない私自身だった。

第六話『三月兔の覚醒』

「どこ行くの？」

「おはよう」

「ねえ、いつ帰ってくる？」

「さあな、てかお前、誰？」

空気が収縮する音がした気がした。ドアは乱暴に閉められる。つまり、そういうことだ。

昨日の声。

「揚羽蝶ってさ、羽化するサナギの方が少ないんだってさ。そのま
ま死ぬのがほとんど」

「へえ、お前は？どっち？羽化するの、しないの？」

「さあ、あんたが決めなよ」

「じゃあお前は、サナギの方。でも死なない。ずっと、次の年にな
って自分より下の世代のサナギが羽化していくのを見てる。でも死
なない」

「残酷なんだ」

「でも、羽化したヤツだって幸せじゃないかもよ」

腕に揚羽蝶のタトゥーをした少年。名前はたぶん聞いたけど、忘
れた。

ガチャリ、鍵が外側からかけられた。内側からなら簡単に開く。
こんな所は、直ぐにでも出ると頭の中の良い子の私が警告する。
けれども私の手足は痺れたように動かない。

視覚だけが、不細工な深海魚みたいにギョロギョロと周りを見る。
少年の部屋は質素で、片付いている。モノクロ調で統一された家
具のセンスは悪くない。

少年が帰ってきた時に、まだ私が居たら、何て言うだろうか。

「おかえり」

口の中で、その言葉を転がすと、酷い吐き気がした。

私は部屋を出る。でっかいマンションの五階よりもさらに、上の階だった。どうやって此処まで上がってきたのか思い出せない。

地味なワンピースの下には、下着を着ていなかった。

「さぶっ」

そこから見える景色は、ごく普通な田園風景でしかなかった。なにかを期待していたハズなのに、もうそれが何だったのか思い出せない。

手摺りがひんやりと冷たくて、額に当てると気が収まった。口の中が乾いていて、正確で無慈悲な空腹が私を襲う。

財布の中には、無造作にねじこまれた一万円札が四枚あった。薄っぺらい紙切れは、頼りなくて惨めで、まるで今の私みたいだった。エレベーターに乗ると、ＴシャツにＧパンというカジュアルな格好をした中年の男性が、三階で乗ってきた。

ランニングシューズが、やけに小さく見えるのは、太い両足のせいだろう。

怪訝そうに、こちらを見ている、ような気がする。すべては私の思い込みなのかもしれないが、頼りない私の素足が震えている。

一階に到着する。男は全く興味が無いというようにマンションから外に向かつて一直線に進んだ。

私は、しばらくマンションのエントランスにある鏡で自分の顔を確かめた。

そこまで酷くないと思う。少なくとも私が思ったよりは……

世界がちよつとだけ、私を裏切った夜に、私は世界を裏切った。正確には、肉体。私のものなのに、私のものじゃないみたい。それが神様とか、世界とかへの反逆だと信じていた。

結局、サナギのまま年を越す哀れな生き物になりさがる。発泡スチロールでできたノアの箱船を漕いで、人の波の中を泳ぐ。

三月の嫌味な風が、裸に近い私の体に吹き付ける。理不尽なのは、何かが狂っているからで、私の方が狂っているのか、それとも私を取り巻く世界が狂っているのか解らない。

野原で発情した三月兔が狂ったワルツを踊れば、私の世界が音を立てて崩れ出す。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5092b/>

三月兔のための即興曲

2010年10月9日04時16分発行